

古川町遺跡第2次調査

現地説明会資料
2012.8.25
神戸市教育委員会

はじめに

古川町遺跡は、妙法寺川左岸の河口付近に立地する遺跡です。今回の発掘調査は、市営住宅の建替えに伴い実施し、古墳時代前期から中世にかけての集落遺跡であることが確認されました。また、海岸部分に形成された砂丘が確認され、当地域の土地利用の変遷を知る上で、貴重な成果を得ることができました。

主な遺構

■古墳時代前期～中期（3～5世紀）■

土器群数か所と竪穴建物1棟を確認しました。

竪穴建物は古墳時代中期に属し、4本柱で平面形は方形です。西側の壁際にカマドを造り、住居と考えられます。砂丘の北端部付近では、古墳時代前期の土器や漁具（土製の網のおもり）が見つかりました。

■奈良時代～平安時代前期（8～9世紀）■

調査区北半部で多くの遺構や遺物を確認しました。遺構の大多数は柱穴で、1辺60cmを超える大型で方形の

柱穴を持つ掘立柱建物も確認されました。同様の大型柱穴は、駅家（うまや）と考えられている須磨区大田町遺跡でも発見されています。

■平安時代末（12世紀末）■

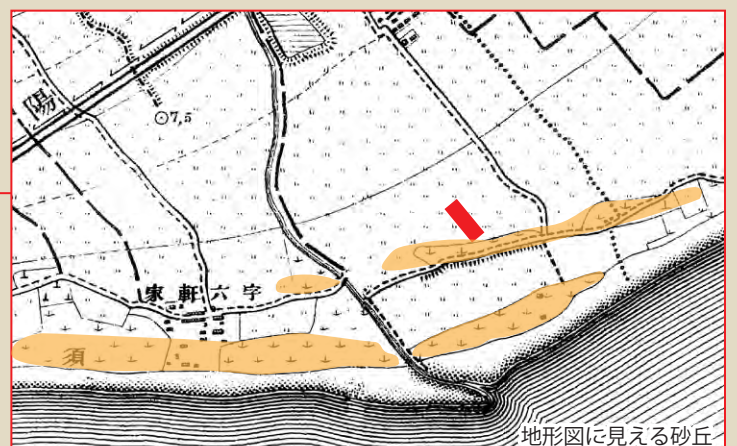
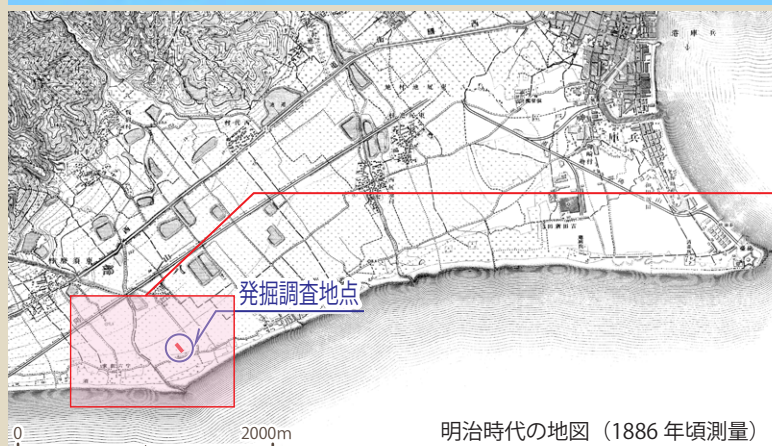
調査区北半部で、耕作に伴う溝と木棺墓の一部が見つかりました。棺や骨は失われていましたが、中国製の白磁碗と当地域産の須恵器碗や土師器小皿が供えられていました。周辺に同時期の井戸や柱穴が存在しており、屋敷地の中に作られた墓の可能性がります。

土地利用の変遷

調査区の北半部は、古墳時代以降の竪穴建物や掘立柱建物、木棺墓、耕作に伴う鋤溝などの遺構や遺物が多く出土しました。このことから、海に接して居住域や生産域が営まれていた事がわかりました。また、漁具も出土しており、海に関連した仕事をしていたことが想像されます。しかし、砂丘の上は人々の生活にはあまり適さないため、遺構や遺物は希薄です。

砂丘の北端部で確認された樹木の根の痕跡は、東西方向に広がり、防砂林が存在していたと考えられます。その時期ははっきりとしませんが、少なくとも江戸時代以前にはあったようです。江戸時代になると、砂丘上にも保水性を持たせるために粘土を張り、畑などの耕作地として利用するようになり、海側に可耕地が拡大していきます。明治時代初めの地形図には、調査地の南側の砂丘がまだ残っています。

今回の発掘調査および現地説明会の開催にあたって、神戸市都市計画総局の協力を得ました。



地形図に見える砂丘



I区の遺構（北から）



木の棺桶を埋めたお墓（木棺墓）
陶磁器が供えられている



I区の遺構（南東から）



III区 砂丘の上の土器群



III区の砂丘（西から）

